

ジェネリックスキルにつながるビジネス英語の新しい試み

A new approach to business English as a generic skill

池頭 純子¹, 守田 美子², 松岡 みさ子³, ゴードン・リバシッジ²

¹大妻女子大学短期大学部家政科, ²大妻女子大学短期大学部英文科

³大妻女子大学社会情報学部

Atsuko Ikegashira¹, Yoshiko Morita², Misako Matsuoka³, and Gordon Liversidge²

¹Otsuma Women's University, Junior College Division, Domestic Science Department

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

²Otsuma Women's University, Junior College Division, English Department

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

³Otsuma Women's University, School of Social Information Studies

2-7-1 Karakida, Tama City, Tokyo, Japan 206-8540

キーワード：ビジネス英語, ジェネリックスキル, 教材

Key words : Business English, Generic skills, A textbook

抄録

現代社会においては、グローバル化社会に対応できる人材が求められ、大学教育においても、そうした人材の育成が急務となっている。単に英語が話せるというだけでは不十分で、その上に困難な状況や、常に変化する状況に柔軟に対応できる能力、「ジェネリックスキル」が求められる。ジェネリックスキルとは、まず状況を客観的に冷静に判断・分析し、周囲の人と適切なコミュニケーションを図り、先を読んで問題を解決する能力である。しかしながら、現在のビジネス英語のテキストの多くは、英語表現の習得を意図したものであり、問題解決には対応していない。本研究では 1) 思考力、状況判断能力を鍛える、2) 自己発信能力を鍛える、3) 英語の基礎力を鍛える という 3つの目的を達成するような英語のテキストとして、多様な視覚情報を与え、それを整理・分析し、英語で言語化する練習をさせるテキストの開発を行った。学生はこれにより多種多様な状況把握とそれを分析して適切に英語で処理するという、実社会で求められると考えられる能力を教室の場でトレーニングすることができると考えられる。

1. 研究の背景

グローバル化社会に対応できる能力は、現代社会が大学卒業者に求める重要な資質の一つである。そこでは今まで以上に、難しい局面でもさまざまな状況を把握し、色々な人とコミュニケーションをとりながら冷静に対処し、柔軟性を持って問題を解決する「ジェネリックスキル」を持っていることが求められる。英語力に関しても、単に英語が読める、書ける、聞ける、話せる、ということが求められるのではなく、さまざまなビジネスシーンで、その場の状況に英語で対応する事が要求されると考えられる。

一方、ビジネス英語の大学生向けテキストは、

いまだに貿易等に関する専門用語の解説や、海外出張や会議・交渉等における英語表現等を中心にしたものが多い。しかしながら、仕事で使用される専門用語は職種や業界により異なり、卒業後すぐに海外出張や英語での会議出席や交渉を任される訳でもない。したがって、そうした教材は一般的な大学生・短大生にとっては現実味に欠け、学習意欲を創出することは難しいのが現状である。

しかしその一方で、グローバル時代を迎え、大学卒業後、どのような職種・業界の企業に就職しても、職場で英語を求められる場面は確実に増えている。多くの企業が海外との連携を持っており、

日常的に英語での電話応対を求められたり、英語でのメールのやり取りを求められたりする。また、職場の同僚が外国人であることは珍しくなく、彼らとの会話は多くの場合英語となる。

つまり現在求められているビジネス英語のテキストは、「ビジネス」という特定のコンテキストでの英会話スキル養成という限定された視点からのみ構成されたものでは、現代社会の状況に対応していくことができないことは明らかであり、多様化したビジネスシーンにおいて英語で適切に問題解決ができるようになることを主眼とするべきである。スキル学習というローカルな達成目標のみを考えるのではなく、より高次のジェネリックスキルの養成という点まで考慮に入れた教材や学習指導法を考えなくてはならない。

本研究では以上の点から、次の3つの目的に対応した英語教材を開発することを主眼とすることとした。

- ① 思考力、状況判断能力を鍛える
- ② 自己発信能力を鍛える
- ③ 英語の基礎力を鍛える

上述したように、限定されたビジネスシーンを想定したモデル会話を練習するといった従来の学習では、実社会で汎用する英語力の養成は期待できない。本質的に必要なのは、ランダムに与えられた状況を把握・分析して、適切に英語で反応することを練習することではないかと考える。ではそのような仮想状況をどのようにして英語教育の場につくったらよいのだろうか。

ここでは学生に絵やイラスト、写真などさまざまな視覚情報を与え、学生にそれらの情報を整理・分析させ、英語によって言語化させるという練習によって、思考・状況判断能力、及び自己発信能力を養成することを考えた。グローバル社会においては、たとえネイティブスピーカーの様に話せなくても、自らの限られた英語能力を最大限に生かして、自分の意見や立場を英語で表現することが求められる。従ってランダムに与えられる視覚教材の中から必要と思われる情報を自ら選択し、それを不完全であっても自分で英語に言語化する作業は、社会人能力の養成に貢献すると考えられる。

しかしながら、英語を特に専攻していない学生

の中には英語をむしろ苦手としている者が少なからずいる。また語学力をコミュニケーションのツールとする立場にあっても、やはり基礎学力は必要である。英語が苦手な学生にどうやって英語の基礎学力を向上させ、進んで英語の自己発信をするように指導したらよいのだろうか。

我々は以下の2つの点に留意して教材作成を進めることとした。

まず第1に、基礎練習として与えられた視覚情報を読み解いて英語で表現する作業をさせる際に、モデルとなる英語の例文やサンプルの文章例を豊富に与え、その中で自然に英語の基本的な文法学習等が復習できるようにする。

第2に、学習者における動機づけを維持させるために、基礎練習の後で自分の気持ちを発表させたり、また自らが選んだ写真やイラストについて発表させたりという発展練習を行うようにする。

学習における動機づけとして効果的であると思われる方法の1つに、学習者のポジティブな感情に訴えるというものがある(白井, 2012)^[1]。語学学習において学習者がポジティブな感情を抱きやすい学習トピックは、学習者自身について話すことだと報告されている。従って学習者がお互いに自身について英語で発表しあうことは学習者の英語に対する興味を喚起し、将来的な自立学習の習慣確立に役立つと思われる。

以下は、このような仮説の下に作成した教材についての概要及び、実験的に作成した教材を用いた授業の実践報告である。

2. 教材の概要

2.1 教材の構成

大学での15週の授業を想定し、以下のようなテーマの題材を提供し、学生に情報を引きださせ、描写させるテキストを計画した。

Unit 1	Describing things
Unit 2	Describing people
Unit 3	Making comments
Unit 4	Time
Unit 5	Map
Unit 6	Weather
Unit 7	Poster 1 ポスターから必要な情報を引き出す
Unit 8	Poster 2 ポスター作成

- Unit 9 Mail 1 メールから情報を読み取る
- Unit 10 Mail 2 必要な情報を整理し返信する
- Unit 11 Article 1 書かれている内容を簡潔にまとめる
- Unit 12 Article 2 自分の周りの出来事について語る
- Unit 13 Graph 1 グラフから情報を読み取り文章化する
- Unit 14 Graph 2 自分の持つ情報をグラフ化する
- Unit 15 Presentation

2013年度はパイロット的に Unit 1 Describing things, Unit 2 Describing people, Unit 3 Describing feelings の3 Unit 分のテキストを作成し、授業を実施した。教材の作成は、池頭、守田、松岡が担当した。

2.2 授業形態

2013年度は、短期大学部家政科生活総合ビジネス専攻2年生、「生活総合ゼミナール」の受講生12名を対象として、試作した教材を使って授業を行った。

「生活総合ゼミナール」は短期大学部家政科生活総合ビジネス専攻2年生の必修科目で、専任教員4名が担当している。池頭は英語を専門としているため、ビジネスシーンで英語が使えるようになることを意図して授業運営を行った。

受講生には4名の編入希望者も含まれていたが、いずれも英語能力はそれほど高くはなく、またそれ以外の学生については、英語が苦手というより、むしろ嫌いという学生も含まれていた。そうした学生に学習意欲を持たせるには、自分のことを語らせるという、今回企画した教材が適切であると考え、この授業での実施となった。

2.3 教材

第1節で示したように試作教材は次の3つの達成目標に対応するような意図の下、作成されている。

- ① 思考力、状況判断能力を鍛える
- ② 自己発信能力を鍛える
- ③ 英語の基礎力を鍛える

以下ではこれらの3つの項目別に教材内容を説明していく。

2.3.1 思考力、状況判断能力を鍛える

上述したように与えられた視覚情報からどの情報を取り出すかを学生自身が決定することは、状況判断能力の養成につながると考える。最終的には、グラフや報告書といった抽象度の高いものからの情報の収集・整理を目指すのが、これまでそうした情報収集の経験のない学生がほとんどであり、取り組みやすいように、最初は身の回りの出来事や事物、それに対する自らのコメントについて考えることから始めることとした。

例えば、Unit 1では図1のようなイラストを示しそこに描かれているものの中から1つを選ばせ、英語で記述させた。



図1

部屋の中の事物のどれを選び、その特徴記述にあたって何を選択するかは学生に一任される。従って学生は、部屋の中で主要と思われる事物、または自分の興味をひくもの等、さまざまな要因を考慮した上で決定することになる。授業時間内で描写させるため、周囲の学生とお互いに何を取り上げどのように描写するかを確認し合う。他の学生の描写を確認することにより、お互いに考え方の違いに気づくことになる。この多様性の認識は、ビジネスシーンにおいて、特に外国人が関わるような場面においては重要と思われる。この教材はこうした多様性に対する寛容さを養成することにもつながると考えられる。また、何を取り上げ、どのように描写するかは、各人の自由である。すなわち正解はない。高校までの英語の授業では、正解を求められてきたが、実際の英語の使用場面では、正解は1つとは限らない。このことを知ることにより、今まで縛られてきた英語の「正解」に対する恐怖からも解放されることが期待される。

基礎練習の終了後は自分の部屋についての描写文を書く演習をさせた。各自が簡単な見取り図を描き、部屋の中にあるもので紹介したいもの、自慢したいものを3つ選んでモデル文を参考に英語で記述し発表する作業を行った。

その後、Unit 2では人物の描写を行い、Unit 3では単なる描写だけではなく、人物の心情といった内面についての観察も行って英語で記述する練習をした。また対照的な2人の人物の状況とその心情を比較するという発展的練習も行い、観察に基づいた推論を言語化するという作業をさせた。

このように与えられた視覚情報を観察し、推測し、選択して英語にするという訓練は、英語というスキル学習だけでなく、学生に考える力や判断する力を求めるものであると考えられる。

2.3.2 自己発信能力を鍛える

本教材では受動的に英語の学習を行うのではなく、学生は自ら伝えたいものを選択してそれを英語にしなくてはならない。従って最初は中学英語で習うような平易な英文を例文として与え、それを参考にして自らモデル文を作成するという練習をさせた。

英語嫌いな学生にとっては、まず「英語は難しい」という、中学・高校6年間に確固として築かれた英語への恐怖心を取り除くことが最も重要であり、また難しい課題である。一見難しそうな文を与えられ、それらの意味を解釈したり、暗記したりする作業は、英語が苦手・嫌いな学生にとっては苦痛以外の何物でもない。そうした作業の繰り返しで英語を好きになるという可能性を最初からつぶしてしまう。今回の教材では、提示する文は解釈には困難を伴わない中学程度の平易な文とし、それらを真似て繰り返し作り出すことで英語に対する抵抗感を少なくするようにした。そうして作り出した平易な文が自分の表現したいことを表すのに使えるという実感を持たせることで、英語で発信しようという意欲につなげるようにした。

文が完成した後、学生たちには自ら作成した文を口頭で発表させた。多くの学生は、中高6年間でほとんど自ら英語で発言することを体験してきていない。時折音読するよう指名された時だけ英語音声が発するが、それ以外に英語を口にするとはなかった。第2言語習得に関しては、発音練習が大きな助けとなる(中森 2009^[2], 有働

2011^[3]など)。繰り返し音読する、発音することにより記憶に残りやすくなることが知られており、この過程を経ないことが、英語に対する苦手意識を助長すると思われる。今回は少人数だったこともあり、時間をかけて音読に取り組んだ。

このような演習は学生が自らの判断で選択した情報を英語で発信することに自信を持たせることにつながるとと思われる。口頭発表を最初から取り入れることにより、学生たちは英語でコミュニケーションを行うこと、特に自分がつくったオリジナルの文を発表することに慣れていく。このような演習は学生の自己発信能力を鍛えることにつながっていくと考える。

2.3.3 英語の基礎力を鍛える

本教材では、日常のコミュニケーションに必要とされる中学英語を中心に基礎力を見直し、基礎知識をただ「知っている」という状態から実際に「使える」という状態に向上させることをめざした。

先に述べた Unit 1 で、学生は与えられた部屋のイラストの事物を英語で描写する際、次のような例文を参考として与えられる。

(1)

(1) There is a table in the room.

(2) The table has four legs.

(3) It is rectangular.

いずれも中学1年で習う文型である。しかし、学生には中学1年の時に習った文が、そのまま実際に日常的に使える、という意識はない。したがってまず(1)に挙げたような文を提示し、平易な表現で自分の考えを伝えることができるという体験をさせることが重要であると考えた。

単文で簡単な表現を英語で言うということを体験させた後、これらの平易な表現の組み合わせが一見複雑な文になる、ということを経験させた。例えば(2)に示したように、簡単な例文を複数まとめることで、重文や複文が出来るということを経験させ、そうした文に対する抵抗感や苦手意識がなくなるようにした。

(2)

3つの文は以下のように1つの文にまとめることができます。カッコに適切な語を入れなさい。

- (a) There is a table and it has four ().
- (b) There is a rectangular table which () four legs in the room.
- (c) There is a rectangular table with four () in the room.

最初の段階で、(1)のようなあまりにも簡単な文の羅列で少し物足りなさを感じていた学生も、接続詞や関係代名詞を使い文を接続することで、今まで読解に困難を感じていたような（一見）複雑な文が出来上がることを体験し、英語に対する見方に変化が表れた。通常学生が体験する、複雑な構造（重文、複文）を簡単な構造にして読み解くという作業をまったく逆の順序、すなわち簡単なものから複雑なものを作り出す作業に変えることで英語の構造を少し理解し、思っていたほど英語は厄介ではないかもしれないと考えようになった。

ここでのポイントは文法の知識を最初から実践で使用することで体験的に獲得させようとしていることである。文法の習得は、多くの場合理論的に理解させるか、練習問題で繰り返し習得させるかであるが、いずれも学生の記憶には残りにくい。本研究で行った方法では、学生が自ら文を作成するに当たり、いくつかの疑問を持つ。そこで必要な文法を与えていくという形式をとることになるため、学生は文法を学習するという意識することなく、様々な文型を体得していくことができる。すべての文法事項を体系的に学習させることはできないが、学生が実際に使用すると想定される日常的な会話や、文章に必要と思われる事項に関しては、このやり方でも十分機能すると思われる。

3. 実践結果

3.1 思考力、状況判断能力を鍛える

授業は基本的に3回を1サイクルとして組み立てた。1回目の授業でイラストを提示し、その中から情報を読み取るという作業を行った。読み取った情報はまず日本語で表現し、聞き手に適切に情報が伝わるかを確認した。

多数の情報を与えられ、その中から重要と思われるものを選択するという作業は、日常生活の中で無意識に行っているが、他者に情報を伝えるために選択するという事は経験が少ないと思われる。どの情報を選択するかはかなり個人差が見られ、Unit1のイラストでの選択は、恣意的なも

のであった。しかし、自らの部屋について描写するに当たっては、各人の意図が伝わるような選択になっていた。初めに書いたものは部分を伝えるものが多く、部屋の全体像、また伝えたいものが部屋中で占めている位置やそれが果たしている役割などの情報が欠けていた。その点を指摘し、他者に自ら伝えたいことを的確に伝えるために必要な情報について認識させた。

Unit 2, Unit 3になると、次第に必要な情報を認識できるようになっていった。時に不要な情報が含まれることもあり、伝えたい内容を確定し、その内容を伝えるために必要十分な情報とは何かを考えさせることを繰り返し行うことで、さらに抽象的な内容の把握にもつながると考えられる。

3.2 自己発信能力を鍛える

情報選択の後、英語モデル文を示し、読み取った情報を英語に直す作業を行った。3回目に発表を行うことを告知し、書いた文をなるべく暗記してくるよう指導した。

3回目の授業では、それぞれが前に出て英語での発表を行った。英語が苦手な学生にとって、また普段人の前で発表する機会のない（少ない）学生にとって、この発表は負担が重いのではないかと思われたが、幸いクラスサイズが12名と小さく、日ごろ親しくしている学生同士だったこともあり、危惧していたよりもスムーズに発表が行われた。発表を聞く側は必ず英語で何らかの質問をするようにした。自ら用意した文ではなく、その場で質問を考えて英語で問うというのはかなり大変なことで、Unit1では多くの学生は日本語で質問を投げかけ、教員がヒントを与えて英語に直させ、修正したものを復唱する形をとった。これだけでもかなりの時間を要したが、ただ教員の助けを求めたのではなく、学生同士でどう表現すればよいのかを考える態度もみられ、自ら参加しようとする態度の涵養という意味では効果が大きかった。

Unit 2, Unit 3と学習が進むにつれ、学生も発表することに自信を持ち、質問も答えもかなり複雑なものを言おうと試みる学生が増えた。2節で述べたように、授業開始当初は英語というだけで嫌悪感すら示していた学生もいたが、従来のような「覚える」「やらされる」という英語の授業とは違い、「自らのことを発信する」という動機づけがあるため、徐々に英語に取り組む意欲が見られるよ

うになった。最初は全く英語を口にできなかった学生たちが、こちらが要請していないときでも英語で質問しようとしたり、発言しようとするようになったことは予想外の大きな成果であったと考える。

3.3 英語の基礎力を鍛える

Unit 1 で習得を目指した表現は There 構文と「～に～がある」という意味で使用する have の使い方 (The room has a big window. など), 「～がある」を see～を使って表現する方法である。

中学程度の簡単な文ではあるが、品詞の区別, 単複の区別, 冠詞の使い方も明確に理解できていない学生にとっては, 難しい表現のようであった。

モデル文を参考にしながら, 辞書を使用して自分の部屋の紹介文を書かせたが, 日本語で表現したい内容と, 英語で表現できる内容の違いが大きく, 作業にはかなりの時間を要した。日本語に縛られて, 難しい表現をしようとする学生に, なるべく自分の知っている単語を使い, 簡単な文で表現するよう指導した。単語を調べても発音のわからないものもあり, 発音の指導も個別に行った。文法についてはあまり細かいことを言わず, 提出された発表用の原稿を修正して返却するにとどめた。時制, 数, 冠詞などについては少しずつ気づけるようになり, 少なくとも誤りであることに気づく, あるいは誤りであるかどうかを確認する作業が身に着いたことも大きな成果といえよう。

4. まとめと課題

2013年度は, 教材を作成しながら授業実践をするということで, 教材の完成度においてはまだまだ

だ不十分なところが多かった。

しかし, 前述したように, 授業実践の中で, 生き生きと英語に取り組む学生の姿を見られたことは大変大きな成果と言える。教材は未完成であるが, 方向性は間違っていないことが確認できたといえよう。

「自らのことを語る」ということを重視したため, 学生が取り組みやすい題材を取り上げた。その結果ビジネスシーンとは少し離れた題材になったが, 今回取り上げたような話題は, ビジネスの現場でも当然日常会話の中で取り上げられるものであり, その意味では決してビジネスシーンと無関係とは言えない。しかし今後はよりビジネスシーンで必要とされる場面に対応できる力の養成につながるようなトピックの選定も視野に入れる必要があると思われる。

付記

本研究は, 大妻女子大学人間生活文化研究所「共同研究プロジェクト」(K085) の助成を受けたものである。

引用文献

- [1]白井恭弘. 英語教師のための第二言語習得論入門. 大修館書店, 2012
- [2]中森誉之. 学びのための英語学習理論 - つまづきの克服と指導への提案. ひつじ書房, 2009
- [3]有働眞理子 “言語学の知見を学校英語教育に活用するという事”. 藤田耕司ほか. 最新言語理論を英語教育に活用する. 開拓社, 2011, p.24-33.

Abstract

The purpose of this research is to develop teaching materials that enable students to acquire skills to become active members in the global community. Many of the English teaching materials available today focus mainly on language skills, and do not give enough attention to “generic skills” that are essential in handling difficult business situations. Working in a global environment requires generic skills such as abilities to assess and analyze problems, and present optimal solutions. Flexibility in communicating one’s ideas while interacting with others plays a significant role in achieving this. In order to better prepare university students to become future leaders, this research has developed teaching materials that would improve their skills in 1) critical thinking 2) self-initiated communication and 3) English. After sorting out and analyzing information given from a wide variety of visual input, students learn to organize and explain clearly in English.

(受付日: 2014年6月15日, 受理日: 2014年6月24日)

池頭 純子（いけがしら あつこ）

現職：大妻女子大学短期大学部家政科教授

津田塾大学大学院文学研究科博士後期課程修了。

専門は英語音韻史。現在は英語の音声指導を中心に、英語指導法の研究も行っている。

主な著書：生成言語研究の現在（いま）（共著，ひつじ書房）

ことばの事実を見つめて（共著，開拓社）